

『行程記』と兵庫

橘川真一

街道は生きている

私の街道の旅は、もう四十年近くになる。「道は面白そうだ」という単純な動機で始まったのだが、次第に道の「不思議さ」に魅せられて、今日に至っている。その間、古代山陽道（近世西国街道）を中心に、あちこちの街道を歩き続けた。そこで実感したのは「街道は生きている」ということであつた。人とともに道はひらけ、文化とともに道は整備されていった。村が生まれ、町になり、宿場になり、城下町になっていった。時代が変わっても道は変わらなかつた。兵庫県下の街道も、近代化や震災などの災害によって失われたところもあるが、ほとんどは昔のままである。

道を歩きながら、さまざまなお出合いがあつた。多くの

人々と知りあつたのはもちろんだが、それ以上に、「道の記憶」をとどめる数多くの文献や紀行文などを知り得たことが大きな力になつた。『播磨巡覧記』はりまめぐりのき（田原相常 明和九年^{一七七二}）、『播磨名所巡覧図絵』（村上石田 文化元年^{一八〇四}）などのほか、『行程記』しんぎ（有馬喜惣太 明和元年^{一七六四}）である。とくに『行程記』の絵地図は詳細を極め、当時の西国街道の様子を伝えており、県下南部の海岸ぞいの歴史を知る貴重な資料として活用されている。

『行程記』と有馬喜惣太

日本の街道絵図は、江戸時代中期ごろから大量に作られた。平和な時代がつづき、大名の参勤交代や武士、文人、庶民の旅が安全になり、ちょっとした旅行ブームが

巻き起こった。旅行案内ともいえる道中記（街道絵図）が必要になってきたのである。幕府が編纂した『五街道分間延絵図』（文化三年（一八〇六））が代表的なものだが、全国『巡覧図絵』などさまざまなものが刊行された。そのなかでも『行程記』は、彩色の美しさや、詳細さ、正確さで、他に類を見ないものである。

『行程記』は、萩藩主毛利宗広が参勤交代の際に道中の城下町、村々、名所旧跡などを知るために絵図方の有馬喜惣太に命じて描かせたといわれる。喜惣太は参勤交代などに随行し、自分の目と足で仕上げた。斜景図という技法で、斜め上から描いており、街道を境に対照的にしているのが特徴である。日本全図を完成させた測量家伊能忠敬は「喜惣太の絵図がある限り、自分の測量を加える必要はない」と感嘆したという。

県下では、西国街道（『行程記』では「中国道」）の本街道全線と、相生市から赤穂市坂越の「赤穂道」、たつの市揖保川町から同市室津までの「室津道」、姫路市下手野から佐用町上月までの「美作道」、西宮市から尼崎市までの「中国道」の脇街道も描いている。

『行程記』を歩く

私の『行程記』の旅は、平成十年（一九九八）から始まった。岡山県との県境船越峠（赤穂郡上郡町）から江戸時代の街道をたどり、播磨と摂津の国境である一の谷（神戸市須磨区）まで歩いた。これは『播磨の街道』（二〇〇四年 神戸新聞総合出版センター）にまとめたので、参考にしてほしい。摂津の道も現在、すこしずつ歩いており、出来れば京都府との境・伊丹市辻までをたどりたいと思っている。

今回は、阪神・淡路大震災で大きな被害を受けた神戸市の中心部は、二百六十年ほど前の『行程記』のころはどうだったか、見てみたい。そのころの神戸は、兵庫城跡（兵庫区中之島）に置かれた幕府勤番所を中心に、港と背後の街並みがあった兵庫が最大の都市であった。『行程記』でも、大きな町を描いており、繁盛していたことがしのばれる。

兵庫を出た街道は、海岸ぞいを東に進み、やたへん八都郡神戸村を通って北野村に入る。『行程記』には「神戸町」と記し、長い街並みを描いており、ここも街道筋としてにぎ

わっていたようである。北には「古城山」があり、花隈山というのが由緒はわからないとしている。この古城は「花熊城」のことで、天正二年（一五七二）に織田信長が有岡城（伊丹城）主の荒木村重に命じて造らせたという。村重の謀叛によってわずか五年で落城した。

岡山大学の池田文庫に「撰津国花熊之城図」がある。天正年間に制作されたものと思われるが、ここに「播磨海道（のちの西国街道）」が書かれている。これには城下の街道ぞいに紺部村（神戸村）、紺部村之本町（神戸町）、ふたつちやむい二茶屋村、はしらのむら走水村がある。『行程記』のころにも、これらの村は存在しているが、記されていない。花熊城は現在、市営駐車場になっており、上には城跡の碑、天守台などが造られている。街道は、いまの元町本通りである。

生田神社と生田川

神戸村を過ぎると三宮大明神（三宮神社）があり、しばらく行くと生田大明神（生田神社）の参道に突き当たる。ここから北へ参道を歩くと、朱塗りの大鳥居の前で東へ曲がる。この参道は、びっしりと並木が連なっており、海岸まで通じていた。文政九年（一八二六）にこの道を歩



『行程記』に描かれた神戸の中心部（山口県文書館所蔵）

いたドイツの医師シーボルトは、『江戸参府紀行』のなかで、桜や杏の並木道だったと記している。

『行程記』には、この辺りを「生田ノ里」と呼んでおり、すぐ東側に生田川（旧生田川）を描いている。川幅は十二間（約二メートル）、水ナシ、矢田部（八部）郡と兔原郡うはらくんの郡境だとある。人家がほとんどない街道が東に連なっており、寂しいところであった。蜀山人しよくさんじんとして知られた狂歌師太田南畝は、文化元年（一八〇四）に供を連れてここを通り、紀行文『革命紀行』のなかで、生田川の水が枯れて、かちわたり（陸渡り）したと書いている。歩いて渡ったのである。桜の並木があり、「中国海道」の石表（道標）があったという。

現在、ここは神戸市の中心部三宮である。どこを捜しても昔の姿はとどめていないが、不思議なことに近代化や空襲、震災などをくぐりぬけて、道筋だけは残っている。それは、まるで昔を語り伝えようとしているようである。